

## ビバハウス便りNO. 80 教育に自由を！ 教師に創造性を！！

ビバハウス 責任者 安達 俊子

ここ数年、12月になると、1年間の疲れがどっと出るのか、体のどこかがおかしくなる。昨年末も12月に入ってすぐ背中に痛みを感じ、朝、寝台からすっと起き上がれない。30分位はかかってしまうといった状態が続くうちに、ある日突然腰が90度に曲がってしまい歩くこともままならなくなってしまった。以前右手の親指の付け根が痛くて、包丁も握れなくなってしまった時に、即痛みから解放して下さったI整骨院で診て頂いたら、背骨が磨り減って周りの神経を圧迫しているのと骨盤がゆがんでいることが原因との事だった。『必ず良くなります』との励ましに勇気付けられて、12月、1月とほぼ毎週2回ほどの通院を続け、最近180度近くまで腰が上がり、どうにか歩けるようになった。

ようやく新年を迎えた気持ちになれた1月上旬、さらにうれしい電話が入った。北星余市高時代、教科が一緒で、学年も一緒だったこともあるM先生からだ。東京の勤務先の休みが取れたので、余市に行くのでぜひ会いたいとの事だった。1月16日、13年ぶりの再会を果たし、お互いの近況を報告しあった。

M先生は、北星余市高の教師同士で結婚をし、夫の東京での新しいお仕事に合わせ、退職された。しかし、教育の仕事を捨てきれず、教員採用試験に合格し、都内の進学校に赴任した。その学校の校長からの第一声は、『有名国立大、私立大に担当クラスから一人でも多く合格者を出すように指導せよ！』と言うものであったという。その後2、3ヶ月後には、『M先生は下の生徒たちの学力を引き上げようとしているが、そんなことはする必要がない。出来なくて単位が取れず辞めていくならそれでよい。それよりもトップの生徒たちを育てなさい。トップ3名の有名大学合格を絶対目標にして指導しなさい』と断言されたという。職員室では、有名大学への合格者の数で、先生方の評価、位置が決められ、ひとりも出せなかった先生は、1年でほかの学校へ異動させられたという事だった。

M先生は、その学校に見切りをつけ、今は、偏差値にとらわれず、自分の希望する大学進学を目指させる予備校で働いている。けれども、本心を言えば、出来るものなら『北星余市』へ戻りたい。生徒たちと心を通い合わせて学校生活を送った日々の素晴らしさが、北星を離れてみて、本当によく実感できた。『北星余市』の教育の掛け替えのない素晴らしさを、自分も加わってもっともっと発展させたいとも語ってくれた。

わたしはM先生との会話から、かつて、いとしいわが教え子、義家弘介さんが、自民党から参議院議員選挙の候補として出馬する際に彼に送ったメッセージのことを思い出していた。彼が参加していた「教育再生会議」からの提言に対し、以下の警告を発していた。

『教育にとって私が一番大切なものだと信じている、北星余市ではこれが完全に保障されたからこそあなた方に私が全力で取り組めた、教師一人ひとりの主体性、創造性を発揮させる方向とは全く逆行する提言ばかりで、本当にかっかりしました。』

いままさに『教育の自由』を守る闘いは、大阪橋下市政・府政、東京石原都政との闘いを頂点に全国で果敢に繰り広げられている。私たちもその一角をあくまで必守したい。

